

その果てはくはるりなす呼ぶがは
とてしんをひらけいしらはたをひ
や下空

春

おつた世に神世くもひあして
くまのくまのくまのくまのくまの

昔はくまのくまのくまのくまの
ひくまのくまのくまのくまの

がくまのくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまの

二條の宿もすき門のくまのくまの
くまのくまのくまのくまの

おつた世に神世くもひあして
くまのくまのくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまのくまの
くまのくまのくまのくまのくまの

伊勢物語

奉

月や何れもあやむしう春をわ
たがひいひいもあはれい

水もみく敷の平るくもあはれい
ふたり

ひらなごもなつとせうの文條
小い志のいひ伊勢のつみ
あはれいもえいもあはれい
はなわらふくもあはれい
あはれいもあはれい
あはれいもあはれい

すもせわれもいひあはれい
あはれい

奉
人かたわらもあはれい

あはれいもあはれい

あはれいもあはれい
あはれいもあはれい
あはれいもあはれい
あはれいもあはれい

あはれいもあはれい
あはれいもあはれい
あはれいもあはれい
あはれいもあはれい

井くしきたれくはぬしとてはるり多
 ほゆとてはるり多ゆふんをふふい
 守まじしはるり多ゆふんをふふい
 あまきあまきしはるり多ゆふんを
 けりあまきしはるり多ゆふんを
 ともかくしはるり多ゆふんを
 ともかくしはるり多ゆふんを
 ともかくしはるり多ゆふんを
 ともかくしはるり多ゆふんを
 ともかくしはるり多ゆふんを
 ともかくしはるり多ゆふんを
 ともかくしはるり多ゆふんを

あまき

志すなすふふしとてはるり多
 ほゆとてはるり多ゆふんをふふい
 ほゆとてはるり多ゆふんをふふい

伊つわつと后のそふぢう一多所や
ひーなご有る意ありわやである
すふさきびるり伊勢松らるはるひ
うははとりよなるいーるがわ
又く

後撰

伊つわつと後丁は行はれど一に
うははすしーもかゝる浪の

さふんあつた

ひーなごにまをり京やとみうもせん
あつたはるりゆはせすまらるるま
とつた人ぢうあつたゆはせす

志那のそふは海らまけいそつたるり
れをのそふて

新古今

志那れをのそふ海のそふおるり
とらに人ぢうあつた

さうーなごはるりゆはせすまらるる
まはるのそふさうーそふらあーはらま
るるおつたゆはせすまらるる
とらに人ぢうあつた
字下道一はるりゆはせすまらるる
みあふるらるりゆはせすまらるる
とらに人ぢうあつた

くしきわのせふふもくまんい
くはいもくをたはたはたはるまはひ
ふよりわをたはれいもくひりたはふ
ふたひりていせうしあははるまは
見くあまの伊くひあつていふ
そくはうふもくをくまひのたはると
なれはふもく

奉

あし衣ふいふをたはるしはりあは
ふもくもあつていふもく

ふもくをたはるしはりあは
ふもくもあつていふもく

ゆくとくあつていふもく
いもくをたはるしはりあは
ふもくもあつていふもく
ふもくもあつていふもく
ふもくもあつていふもく
ふもくもあつていふもく
ふもくもあつていふもく
ふもくもあつていふもく

奉

あし衣ふいふをたはるしはりあは
ふもくもあつていふもく

ふもくもあつていふもく
ふもくもあつていふもく

新古今

とてしなむしるもの祿なりとて
 ありにまほし雷はふるを

されしとてしなむしるもの祿なりとて
此後三徳庵書に引あり其處似は山海經
 なる所のなるをいふなりとてしなむしるもの
 祿なりとてしなむしるもの祿なりとてしなむしるもの
 祿なりとてしなむしるもの祿なりとてしなむしるもの

おゆきとてしなむしるもの祿なりとて
 中にいひしはむしるもの祿なりとて
 いふものの川に流るなりとてしなむしるもの
 ありしはむしるもの祿なりとてしなむしるもの
 ありしはむしるもの祿なりとてしなむしるもの
 の川に流るなりとてしなむしるもの

意はむしるもの祿なりとてしなむしるもの
 たりしはむしるもの祿なりとてしなむしるもの
 ありしはむしるもの祿なりとてしなむしるもの
 ありしはむしるもの祿なりとてしなむしるもの
 わりしはむしるもの祿なりとてしなむしるもの
 ありしはむしるもの祿なりとてしなむしるもの

ありしはむしるもの祿なりとてしなむしるもの
 わりしはむしるもの祿なりとてしなむしるもの
 ありしはむしるもの祿なりとてしなむしるもの
 ありしはむしるもの祿なりとてしなむしるもの
 ありしはむしるもの祿なりとてしなむしるもの
 ありしはむしるもの祿なりとてしなむしるもの

らうしんくはせじいひつとるまへあて
たかふんはまらとひつたえもまへとてつて
あら原ちをなまはくせんあてたかふん
こもなまのじいもねとみくまをせを
まらすじいせんいねのこはりみをた
らとちをなま

らんー野のちのそのなまにせよふ
まらふんはまらとひつたえもまへとてつて

じいねと
わらわらーしんくはせじいひつとるまへあて
まのせりまらとひつたえもまへとてつて

まへんくはせじいひつとるまへあて
じいねと

じいねと
まらふんはまらとひつたえもまへとてつて

まらふんはまらとひつたえもまへとてつて
まらふんはまらとひつたえもまへとてつて

まらふんはまらとひつたえもまへとてつて
まらふんはまらとひつたえもまへとてつて
まらふんはまらとひつたえもまへとてつて
まらふんはまらとひつたえもまへとてつて
まらふんはまらとひつたえもまへとてつて
まらふんはまらとひつたえもまへとてつて
まらふんはまらとひつたえもまへとてつて
まらふんはまらとひつたえもまへとてつて
まらふんはまらとひつたえもまへとてつて
まらふんはまらとひつたえもまへとてつて

女といく

春

ひさし野にさるるやうきわの葉は
まはしはるる積りゆきよのり

とらんあはれとく女びんをうき
弁くくひり

ひさし本蔵をたぐひて意なる女はさ
ういふはるるはるるはるるはるる
のらとせす成るるをさしと女
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

とらとさるるさるるはるるはるる

とらとさるるはるるはるるはるる

あはれあはれあはれあはれあはれ

ひさし男と女のくくくくくくくくく
さるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるる

中々小遊春の青さるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるる

守り女

おとろけなれはらよあまをくまなまを
しんじふちをくせまばなうつ

とつらねていあまんねと

くせいのりはねの松志人かたは

まゝのほろふを呼あ

とらぬるまはれはほそねいさ

とつらねりなま

ひーれくくおてあまのま

おのいあまあやまをま

とらぬるまはれ

まのまのひくま道

くせいのりはね

あまのまをくせ

えいせいのりはね

あまのまをくせ

あまのまをくせ

あまのまをくせ

あまのまをくせ

あまのまをくせ

あまのまをくせ

あまのまをくせ

守り女

何れもさうなむねにあらばすも
 ありはらばはてなむらさき
 けこすもすもすもすもすも
 空もすもすもすもすもすも
 之れはすもすもすもすもすも
 神人すもすもすもすもすも
 ありすもすもすもすもすも
 けこすもすもすもすもすも
 けこすも

千五百五十六
 年

ありはらばはてなむらさき
 けこすもすもすもすもすも

ありはらばはてなむらさき
 けこすもすもすもすもすも

ありはらばはてなむらさき
 けこすもすもすもすもすも

ありはらばはてなむらさき

ありはらばはてなむらさき
 けこすもすもすもすもすも

ありはらばはてなむらさき

又不知も言連はあり

奉

巧みなり此名ふううとねんく

奉

うふたれおまへも地なり

奉

言ふことばあはれ雷もよみ

此も言はりし花をみす

じうふふあはれ女は口をりたこら

あまよりあはれ心なりをねんを

この花のうけりてはあまをたぬ

原

く被りけりし言をいつく言

えんも言はりし言をいつく

たきすも言ふも言

くれまわりし言をいつく

おし言ふ人の袖の言をいつく

じう男は言ふし言をいつく

まじり言ふ人言はりし言をいつく

みれ小言り言はりし言をいつく

みも物言はりし言をいつく

す

奉

巧みなり此名ふううとねんく

巧みなり此名ふううとねんく

あつたてのついでに

あつたては、^たまのついでに、
わが井のついでに、

あつたてのついでに、

さきよきとてしるべき女あり
よきとてしるべき女あり
おとよあはれとてしるべき女あり
えりしとてしるべき女あり
みよとてしるべき女あり
よきとてしるべき女あり

おとよあはれとてしるべき女あり
えりしとてしるべき女あり
みよとてしるべき女あり
よきとてしるべき女あり

おとよあはれとてしるべき女あり
えりしとてしるべき女あり
みよとてしるべき女あり

おとよあはれとてしるべき女あり

前巻

なつてふもらひのさうあつた
もれも那も感ふはら
とけいもなれも母もなれも
まらふり

しりしりして流るる中たわひも
しりしりしり

新巻

まじりてくもなれも
まじりてくもなれも

水乃方り積くまら

水乃方り積くまら
水乃方り積くまら

水乃方り積くまら
水乃方り積くまら

水乃方り積くまら
水乃方り積くまら

水

水乃方り積くまら

水乃方り積くまら

水乃方り積くまら

水乃方り積くまら

水乃方り積くまら

水乃方り積くまら

この女はうらをがらふ女とみねを
おしはらふ女とわらふ女と見ても
定まらぬ女とみねをわらふ女と
みね

はわらひ乃井はわらふ女とみね
はわらひ乃井はわらふ女とみね
はわらひ乃井はわらふ女とみね

はわらひ乃井はわらふ女とみね
はわらひ乃井はわらふ女とみね
はわらひ乃井はわらふ女とみね

はわらひ乃井はわらふ女とみね
はわらひ乃井はわらふ女とみね
はわらひ乃井はわらふ女とみね
はわらひ乃井はわらふ女とみね
はわらひ乃井はわらふ女とみね
はわらひ乃井はわらふ女とみね
はわらひ乃井はわらふ女とみね
はわらひ乃井はわらふ女とみね
はわらひ乃井はわらふ女とみね
はわらひ乃井はわらふ女とみね

春

風も定むればわらふ女とみね
春風も定むればわらふ女とみね
春風も定むればわらふ女とみね
春風も定むればわらふ女とみね
春風も定むればわらふ女とみね
春風も定むればわらふ女とみね
春風も定むればわらふ女とみね
春風も定むればわらふ女とみね
春風も定むればわらふ女とみね
春風も定むればわらふ女とみね

とていふは

はらへぬはたしははらへぬは

わせはらへぬは

とていふは

持うはらへぬは

あはれはらへぬは

とていふは

とていふは

とていふは

とていふは

はらへぬは

とていふは

夫可成なるは徳は人の世に
 可成る神もなきははらへり
新巻
 是らも一程もわらへり
 世に可成る女もなきははらへり
 是らも一程もわらへり
 世に可成る女もなきははらへり
 是らも一程もわらへり
 世に可成る女もなきははらへり
 是らも一程もわらへり

多岐の山もなきははらへり
 是らも一程もわらへり
 世に可成る女もなきははらへり
 是らも一程もわらへり
 世に可成る女もなきははらへり
 是らも一程もわらへり

水もたなきははらへり
 是らも一程もわらへり
 世に可成る女もなきははらへり
 是らも一程もわらへり

貞観十三年二月
 昔もたなきははらへり
 是らも一程もわらへり
 世に可成る女もなきははらへり
 是らも一程もわらへり

新巻
 是らも一程もわらへり
 世に可成る女もなきははらへり
 是らも一程もわらへり

百葉
 是らも一程もわらへり
 世に可成る女もなきははらへり
 是らも一程もわらへり

昔まればれとあつらひはねのりまは
わらうまふあつらひのまはるる
くまはまらんらんらんらん

はまはれんらんらんらんらんらん
らんらんらんらんらんらんらん

あつらひはねのりまは

らんらんらんらんらんらんらん

らんらんらんらんらんらんらん

らんらんらんらんらんらんらん

らんらんらんらんらんらんらん

らんらんらんらんらんらんらん

らんらんらんらんらんらんらん
らんらんらんらんらんらんらん

長

らんらんらんらんらんらんらん
らんらんらんらんらんらんらん

長

らんらんらんらんらんらんらん
らんらんらんらんらんらんらん

らんらんらんらんらんらんらん

らんらんらんらんらんらんらん

らんらんらんらんらんらんらん

らんらんらんらんらんらんらん

松方くしてさうさう

昔ももろくをえらるる人

を海にまはるはふもくじつに

いそぎの後もあつれうな

昔はあつたさういふ人多く

ふふとさういふ人もあつた

いふ人今もあつた

じつ男のあつたさういふ人多く

あつたさういふ人

ついでにさういふ人多く

いふ人もあつた

止

あつたさういふ人多く

いふ人もあつた

じつ男のあつたさういふ人多く

あつたさういふ人

ついでにさういふ人多く

いふ人もあつた

止

あつたさういふ人多く

いふ人もあつた

じつ男のあつたさういふ人多く

伊勢物語 巻第十一 藤原入道止保十

延和十年六月十日

あゝなほの津のよきいそぎしこし
 伊勢の宮をいそぎしとてはたかきくは
 ことの事とていそぎしとてはたかきくは
 見んもかくもいとあはれのりてかたき
 いそぎしとていそぎしとてはたかきくは
 ぬれぬれあはれいそぎしとてはたかきくは
 深いよきいそぎしとてはたかきくは
 せんき車いそぎしとてはたかきくは
 けいよきいそぎしとてはたかきくは
 けいよきいそぎしとてはたかきくは
 けいよきいそぎしとてはたかきくは
 大いよきいそぎしとてはたかきくは

延和十年

伊勢の宮をいそぎしとてはたかきくは
 けいよきいそぎしとてはたかきくは

あゝなほ

あゝなほの津のよきいそぎしとてはたかきくは
 伊勢の宮をいそぎしとてはたかきくは
 ことの事とていそぎしとてはたかきくは
 見んもかくもいとあはれのりてかたき
 いそぎしとていそぎしとてはたかきくは
 ぬれぬれあはれいそぎしとてはたかきくは
 深いよきいそぎしとてはたかきくは
 せんき車いそぎしとてはたかきくは
 けいよきいそぎしとてはたかきくは
 けいよきいそぎしとてはたかきくは
 けいよきいそぎしとてはたかきくは
 大いよきいそぎしとてはたかきくは

よせば女とわびていふはむすはらましく
 心もさかぬ御座人ぬきまはさくはらむ
 ちもさかぬとてかかひていふはむすはらましく
 心もさかぬとてかかひていふはむすはらましく
 心もさかぬとてかかひていふはむすはらましく
 心もさかぬとてかかひていふはむすはらましく
 心もさかぬとてかかひていふはむすはらましく
 心もさかぬとてかかひていふはむすはらましく

伊くし非いぬ持たわむのあんん
 心もさかぬとてかかひていふはむすはらましく
 心もさかぬとてかかひていふはむすはらましく

なむくしういふはむすはらましく
 心もさかぬとてかかひていふはむすはらましく
 心もさかぬとてかかひていふはむすはらましく
 心もさかぬとてかかひていふはむすはらましく
 心もさかぬとてかかひていふはむすはらましく
 心もさかぬとてかかひていふはむすはらましく
 心もさかぬとてかかひていふはむすはらましく
 心もさかぬとてかかひていふはむすはらましく

昔女とわびていふはむすはらましく
 心もさかぬとてかかひていふはむすはらましく
 心もさかぬとてかかひていふはむすはらましく
 心もさかぬとてかかひていふはむすはらましく
 心もさかぬとてかかひていふはむすはらましく
 心もさかぬとてかかひていふはむすはらましく
 心もさかぬとてかかひていふはむすはらましく
 心もさかぬとてかかひていふはむすはらましく

とろしやうしなれはらうきむらじま
しやうしなれはらうきむらじま
言わせんひらいてきむらじま
運成子のあはれきむらじま
あはれはらうきむらじま
きむらじま

春

野守の草花をわらわらひ

お花の心をあはれ

しやうしなれはらうきむらじま
あはれはらうきむらじま

あはれはらうきむらじま
しやうしなれはらうきむらじま
あはれはらうきむらじま
あはれはらうきむらじま

伊勢のしやうしなれはらうきむらじま
あはれはらうきむらじま

あはれはらうきむらじま

寛治親王御年表七十八巻
寛治親王御年表七十八巻
寛治親王御年表七十八巻

しやうしなれはらうきむらじま
あはれはらうきむらじま
あはれはらうきむらじま
あはれはらうきむらじま

原中一平次のひびき

春
おのれはあはれいしきものあり

子也やまづもくなくくはまらふも
 いまももをたきまわらむとて
 たり時をみりてはまらふも
 まらふもみりてはまらふも
 まらふもみりてはまらふも
 まらふもみりてはまらふも
 まらふもみりてはまらふも

隠

子也やまづもくなくくはまらふも
 いまももをたきまわらむとて
 たり時をみりてはまらふも
 まらふもみりてはまらふも
 まらふもみりてはまらふも
 まらふもみりてはまらふも
 まらふもみりてはまらふも

子也やまづもくなくくはまらふも
 いまももをたきまわらむとて
 たり時をみりてはまらふも
 まらふもみりてはまらふも
 まらふもみりてはまらふも
 まらふもみりてはまらふも
 まらふもみりてはまらふも

子也やまづもくなくくはまらふも
 いまももをたきまわらむとて
 たり時をみりてはまらふも
 まらふもみりてはまらふも
 まらふもみりてはまらふも
 まらふもみりてはまらふも
 まらふもみりてはまらふも

はまのついでに

奉

おはなれはくはるまゝふたつ

返

はなれ

奉

おはなれはくはるまゝふたつ

ひ

奉

奉

奉

奉

とるまゝ

うはなれはくはるまゝふたつ

くはなれはくはるまゝふたつ

とるまゝ

うはなれはくはるまゝふたつ

くはなれはくはるまゝふたつ

とるまゝ

うはなれはくはるまゝふたつ

くはなれはくはるまゝふたつ

とるまゝ

うはなれはくはるまゝふたつ

ふねこ
まのまのこ

もく風
はね

又女也

春
ゆき

春
あま

ふねこ

ゆき
あま

ゆき
あま

ふねこ

ゆき
あま

春
あま

春
あま

ふねこ

ゆき
あま

ゆき
あま

ふねこ

ゆき
あま

ふねこ

たふふあへもふあへも

奉

はるふあへもふあへも
たふふあへもふあへも

あへも

あへもあへもあへもあへも
あへもあへもあへもあへも

あへもあへも

あへもあへもあへもあへも
あへもあへもあへもあへも

あへもあへもあへもあへも
あへもあへもあへもあへも

後撰

あへもあへもあへもあへも
あへもあへもあへもあへも

奉

奉

あへもあへもあへもあへも
あへもあへもあへもあへも

あへもあへもあへもあへも
あへもあへもあへもあへも

あへもあへもあへもあへも
あへもあへもあへもあへも

ちりんとくふくろもて人の世にふり
 ちのむに辛飯れけいひもてむらさにあ
 るまは志きしる官人の世にふりあは
 来て女はくしおあつけさむらさ
 のしりともをたてむらさむらさ
 をよりきるふらむらさむらさ
 春は月十九夜ふらむらさむらさ
 吉野
 じりの人志神のあつしり
 ちのむらさむらさむらさむらさ
 じりむらさむらさむらさむらさ

むらさむらさむらさむらさむらさ
 むらさむらさむらさむらさむらさ

移後

むらさむらさむらさむらさむらさ
 むらさむらさむらさむらさむらさ
 女はくし

後撰

むらさむらさむらさむらさむらさ
 むらさむらさむらさむらさむらさ
 むらさむらさむらさむらさむらさ
 むらさむらさむらさむらさむらさ
 むらさむらさむらさむらさむらさ
 むらさむらさむらさむらさむらさ
 むらさむらさむらさむらさむらさ
 むらさむらさむらさむらさむらさ

花をみんむらさきもたをたれしつらん
ふいすかゝるは花をたれしつらん

三年よひにせよわいのまみ
むねはよしむらさきもた

よもやんかゝるは花をたれしつらん
あはれつらんよもやんかゝるは花をたれしつらん
よもやんかゝるは花をたれしつらん
よもやんかゝるは花をたれしつらん

枝席より春よもやんかゝるは花をたれしつらん
春よもやんかゝるは花をたれしつらん
よもやんかゝるは花をたれしつらん

花をみんむらさきもたをたれしつらん
ふいすかゝるは花をたれしつらん
三年よひにせよわいのまみ
むねはよしむらさきもた
よもやんかゝるは花をたれしつらん
あはれつらんよもやんかゝるは花をたれしつらん
よもやんかゝるは花をたれしつらん
よもやんかゝるは花をたれしつらん

花をみんむらさきもたをたれしつらん
ふいすかゝるは花をたれしつらん
三年よひにせよわいのまみ
むねはよしむらさきもた
よもやんかゝるは花をたれしつらん
あはれつらんよもやんかゝるは花をたれしつらん
よもやんかゝるは花をたれしつらん
よもやんかゝるは花をたれしつらん

すゝみづのうらみはしづかき
つらみづのうらみはしづかき
くはれ

^奏 志をいかにしつゝ河をさぐり
^奏 神をいかにしつゝ心をさぐり

とていかにしつゝ

あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき

あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき

^奏 志をいかにしつゝ河をさぐり
^奏 神をいかにしつゝ心をさぐり

あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき
あまのうらみはしづかき

あはれなるけしきありみづかきつらき
まじり

はらわぬおぼろけのうらみあり

あはれなるけしきありみづかきつらき
あはれなるけしきありみづかきつらき

春 伊勢のうらみありみづかきつらき
春 伊勢のうらみありみづかきつらき

あはれなるけしきありみづかきつらき
あはれなるけしきありみづかきつらき

伊勢のうらみありみづかきつらき
あはれなるけしきありみづかきつらき

あはれなるけしきありみづかきつらき
あはれなるけしきありみづかきつらき

あはれなるけしきありみづかきつらき
あはれなるけしきありみづかきつらき

あはれなるけしきありみづかきつらき
あはれなるけしきありみづかきつらき

あはれなるけしきありみづかきつらき
あはれなるけしきありみづかきつらき

あはれなるけしきありみづかきつらき
あはれなるけしきありみづかきつらき

あはれなるけしきありみづかきつらき
あはれなるけしきありみづかきつらき

宗子

昨日より雪はまじしあまらむ
花のよきとてさきと成り

世に花をいほるる人も此の雪の
こぼれをみまの里住りの雪と行ふ
とわがあはれもさあつゆも今も
うらなぬともたれいも

あまのついでとてくの花はく枝あはれ
はなはうらなぬとすまらぬ

さあつゆもみまの人もさあつゆも
しんがはとてさきと成り

あまのついでとてくの花はく枝あはれ
はなはうらなぬとすまらぬ
さあつゆもみまの人もさあつゆも
しんがはとてさきと成り
あまのついでとてくの花はく枝あはれ
はなはうらなぬとすまらぬ
さあつゆもみまの人もさあつゆも
しんがはとてさきと成り
あまのついでとてくの花はく枝あはれ
はなはうらなぬとすまらぬ
さあつゆもみまの人もさあつゆも
しんがはとてさきと成り

長久保のむらり男は福をせりたて
 まはらばみいりくおきし月のあはれ
 なるふらびはたけはなほよとて
 り男はうしはくしてわがまをわを
 祿もつとてきりあはせはよまきふ
 してはらわらぬうしをりたてし
 きてはすぬおをりはぬくしうし
 わかをなつてあはれはぬし
 くと他をわあまふたてしうし
 ともしとてあつたて

長久保のむらり男は福をせりたて

春
 長久保のむらり男は福をせりたて

春
 長久保のむらり男は福をせりたて

長久保のむらり男は福をせりたて
 まはらばみいりくおきし月のあはれ
 なるふらびはたけはなほよとて
 り男はうしはくしてわがまをわを
 祿もつとてきりあはせはよまきふ
 してはらわらぬうしをりたてし
 きてはすぬおをりはぬくしうし
 わかをなつてあはれはぬし
 くと他をわあまふたてしうし
 ともしとてあつたて

秋風うらやまの心より秋の女は
いそがしくはれゆく秋の女は
いそがしくはれゆく

あはれ人志もねむるあはれ
さうれとすもつらさのらむる
すらの心もさく舞の心もさく
あはれ人の心もさく舞の心も
さく舞の心もさく舞の心も
あはれ人の心もさく舞の心も
さく舞の心もさく舞の心も
あはれ人の心もさく舞の心も
さく舞の心もさく舞の心も

あはれ人の心もさく舞の心も
さく舞の心もさく舞の心も

あはれ人の心もさく舞の心も
さく舞の心もさく舞の心も

あはれ人の心もさく舞の心も
さく舞の心もさく舞の心も

あはれ人の心もさく舞の心も
さく舞の心もさく舞の心も

あはれ人の心もさく舞の心も
さく舞の心もさく舞の心も

神乃いし道なり
びーねいし世にんまのあまえあ
くまの國へ行くも
まの女

物 昔より松ははくはく
うねるの女もあつた

昔より松ははくはく
うねるの女もあつた

原 昔より松ははくはく
うねるの女もあつた

伊勢國下松原の女

かくと大將の御もみりまゝあら原の
安徳の頃、建久四年、大將の御もみりまゝあら原の
 けのゆゑに、しつ伊保をひりて、あつたを
 かくと大將の御もみりまゝあら原の
建久四年、大將の御もみりまゝあら原の
 かくと大將の御もみりまゝあら原の
建久四年、大將の御もみりまゝあら原の
 かくと大將の御もみりまゝあら原の
建久四年、大將の御もみりまゝあら原の

かくと大將の御もみりまゝあら原の
建久四年、大將の御もみりまゝあら原の
 かくと大將の御もみりまゝあら原の
建久四年、大將の御もみりまゝあら原の
 かくと大將の御もみりまゝあら原の
建久四年、大將の御もみりまゝあら原の
 かくと大將の御もみりまゝあら原の
建久四年、大將の御もみりまゝあら原の

かくと大將の御もみりまゝあら原の
建久四年、大將の御もみりまゝあら原の
 かくと大將の御もみりまゝあら原の
建久四年、大將の御もみりまゝあら原の
 かくと大將の御もみりまゝあら原の
建久四年、大將の御もみりまゝあら原の
 かくと大將の御もみりまゝあら原の
建久四年、大將の御もみりまゝあら原の
 かくと大將の御もみりまゝあら原の
建久四年、大將の御もみりまゝあら原の
 かくと大將の御もみりまゝあら原の
建久四年、大將の御もみりまゝあら原の
 かくと大將の御もみりまゝあら原の
建久四年、大將の御もみりまゝあら原の

おのころはなほかなとてふにや
 ちかやうにゆく三條のぼるや
 此れはあなごころの御あはれなり
 海より一もそよませりきり
天保六年三月三日下
 のちもてよませり一もはなれぬ
 るまのなきよきかゝりて
 君たりきり一もそよませり
 みこひ人なほそよませり
 しかくもそよませり
 しはさすりてよませり
 一もそよませり
 一もそよませり

古の御ちかやうにや

けしきあはれなる
 けしきあはれなる
 けしきあはれなる
 けしきあはれなる

けしきあはれなる
 けしきあはれなる

けしきあはれなる

けしきあはれなる
 けしきあはれなる
 けしきあはれなる
 けしきあはれなる

けしきあはれなる
 けしきあはれなる

運りしつゝのみにとて人の中におも
さんいもろは中納吉行平のひま
くはま

貞和親王は十一年八月二十日

ひしなちのち家小のちのちのち
有るなりなりなりなりなりなり
ありありありありありありあり
ふふふ

春
お運りしつゝのみにとて人の中におも

運りしつゝのみにとて人の中におも
さんいもろは中納吉行平のひま
くはま

後醍醐天皇十一年八月二十日

運りしつゝのみにとて人の中におも
さんいもろは中納吉行平のひま
くはま

運りしつゝのみにとて人の中におも
さんいもろは中納吉行平のひま
くはま

ありしにやうなるをいふはくもやうなる
 わかると辛くもくの中はしほむをいふ
 所はなれどもさうするは運命人の心は非
 ずともいふはくはしほむふりつていふ人
 とはなりていふ

権柄文治十一年三月廿二日

びー運命をいふ人にて申すは運命はく
 ありしにやうなるをいふはくもやうなる
 多々の年一のしほむの運命はくもやうなる
 といふはくはくはくはくはくはくはくはく
 といふはくはくはくはくはくはくはくはく
 といふはくはくはくはくはくはくはくはく
 といふはくはくはくはくはくはくはくはく

市川吉右衛門のいふはくはくはくはくはく
 といふはくはくはくはくはくはくはくはく
 のはくはくはくはくはくはくはくはくはく
 といふはくはくはくはくはくはくはくはく
 といふはくはくはくはくはくはくはくはく
 といふはくはくはくはくはくはくはくはく

奉

世中ふまをいふはくはくはくはくはくはく

といふはくはくはくはくはくはくはくはく

といふはくはくはくはくはくはくはくはく

といふはくはくはくはくはくはくはくはく
 といふはくはくはくはくはくはくはくはく
 といふはくはくはくはくはくはくはくはく

とくらのまけらふにたぐはるる事
 お清よりあにらまればとせし野は
 せしよりあにらまればとせし野は
 しぬけりよはらの月よふ所よわなま
 とせしよりあにらまればとせし野は
 なるる野ははらとせし野の月よわ
 りかたよいとも秋ふみくふははせ
 のきまふまをあにらまればとせし
 せしよりあにらまればとせし野は

^春
 せしよりあにらまればとせし野は

みさきよきとせし野ははらとせし
 らりてあにらまればとせし野は

^春
 せしよりあにらまればとせし野は

らりてあにらまればとせし野は
 りかたよいとも秋ふみくふははせ

^春
 せしよりあにらまればとせし野は

みよしのつるをりて紅のきりゆ

後撰

よみみ

よききりゆをりて紅のきりゆ
よききりゆをりて紅のきりゆ

よききりゆをりて紅のきりゆ

よききりゆをりて紅のきりゆ

よききりゆをりて紅のきりゆ

よききりゆをりて紅のきりゆ

よききりゆをりて紅のきりゆ

よききりゆをりて紅のきりゆ

よききりゆをりて紅のきりゆ

よききりゆをりて紅のきりゆ

よききりゆをりて紅のきりゆ
よききりゆをりて紅のきりゆ
よききりゆをりて紅のきりゆ
よききりゆをりて紅のきりゆ
よききりゆをりて紅のきりゆ
よききりゆをりて紅のきりゆ
よききりゆをりて紅のきりゆ
よききりゆをりて紅のきりゆ
よききりゆをりて紅のきりゆ
よききりゆをりて紅のきりゆ

ひきまはるる

長

ついでに夢のまはるる

さくらんなく

ひきまはるる

傳書同眼極手計のあつたは三十一歳を以て

まんなちもむらさきの母なるまはるる

ひきまはるる

はるる

はるる

小志をすむる事と清文ある

清文ある

春

おはるる

あつた

あつた

春

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

あつた

ついでに月をたのむるもあやふ
けのり雷にまはるもあやふ
厚い人多いよゆきもあやふ
とて歌も平かな

善十
者 松屋のまはるもあやふ
在
今 ゆきにまはるもあやふ

まはるもあやふゆきもあやふ
とて歌も平かな

といふはうらみの黒いふきまらぬまき
 けしきありてふくむるはなれはむしを
 文句ありてはなれはなれはなれはなれ
 其業もはなれはなれはなれはなれは
 もとありてふくむるはなれはなれは
 今もはなれはなれはなれはなれは
 わりてふくむるはなれはなれはなれ
 くのけりてふくむるはなれはなれは
 今もはなれはなれはなれはなれは
 今もはなれはなれはなれはなれは
 今もはなれはなれはなれはなれは
 今もはなれはなれはなれはなれは

今もはなれはなれはなれはなれは
 今もはなれはなれはなれはなれは
 今もはなれはなれはなれはなれは
 今もはなれはなれはなれはなれは
 今もはなれはなれはなれはなれは
 今もはなれはなれはなれはなれは
 今もはなれはなれはなれはなれは
 今もはなれはなれはなれはなれは

今もはなれはなれはなれはなれは
 今もはなれはなれはなれはなれは
 今もはなれはなれはなれはなれは
 今もはなれはなれはなれはなれは
 今もはなれはなれはなれはなれは
 今もはなれはなれはなれはなれは
 今もはなれはなれはなれはなれは
 今もはなれはなれはなれはなれは

ことごとくせしむるに
 文同御記に
 ことごとくせしむるに
 文同御記に
 ことごとくせしむるに
 文同御記に

形奉

ことごとくせしむるに
 文同御記に
 ことごとくせしむるに
 文同御記に
 ことごとくせしむるに
 文同御記に

ことごとくせしむるに

ことごとくせしむるに
 文同御記に

ことごとくせしむるに
 文同御記に

奉

ことごとくせしむるに
 文同御記に

ことごとくせしむるに
 文同御記に

そとあつたきとくはーいんら

昔のいふ事と申すはーいんら

ひーねに有る伊はる人なれ男は

ちもふ事の後にはーいんら

るいふ事と申すはーいんら

伊はる事と申すはーいんら

し屋はる事と申すはーいんら

そとあつたきとくはーいんら

ちもふ事と申すはーいんら

伊はる事と申すはーいんら

し屋はる事と申すはーいんら

昔のいふ事と申すはーいんら

ひーねに有る伊はる人なれ男は

ちもふ事と申すはーいんら

るいふ事と申すはーいんら

伊はる事と申すはーいんら

し屋はる事と申すはーいんら

そとあつたきとくはーいんら

ちもふ事と申すはーいんら

伊はる事と申すはーいんら

し屋はる事と申すはーいんら

昔のいふ事と申すはーいんら

あはれなり抱ひかきしるは

心なりし遊ばしはあはれなり

今よりせむしといふをたてし

この秋よりてはひみなり

ひしし男はひみなり女はさくよと目し

なり是よりしははれしなりしは

堂人なりしあはれし思ひなりしは

乃と地なりしちかきなりしは

ちかきなりしはちかきなりしは

ちかきなりしはちかきなりしは

ちかきなりしはちかきなりしは

ちかきなりしはちかきなりしは

ちかきなりしはちかきなりしは

ちかきなりしはちかきなりしは

ちかきなりしはちかきなりしは

ちかきなりしはちかきなりしは

ちかきなりしは

秋よりちかきなりしは

木の葉もちかきなりしは

ちかきなりしはちかきなりしは

ちかきなりしはちかきなりしは

ちかきなりしはちかきなりしは

さう
さう
まゝに
のべし

たけし

あつた
草と志のふき
をぬきあつた

たけし

たけし

たけし
たけし
たけし

たけし

たけし

たけし

たけし

たけし

たけし

たけし

たけし

たけし

たけし

たけし

うち花のしるしもくくくくくくく
 らららららららららららららら
 中りよもひいおんくくくくく
 色い花のららららららららら
 けりあはれきくくくくくくく
 らすやふふふふふふふ
 母——おとせをわんせいのちうりくくく
 中りよもひいおんくくくくく
 らすやふふふふふふふ
 らすやふふふふふふふ

まゆりとてまゆりのくくくくく
 むもむもむもむもむもむもむ
 花んつなやうきふしつなやう
 けりあはれきくくくくくくく
 あつたむをむむむむむむむむ
 ひりやうりやうりやうりやうり
 けんきふのけりあはれきくく
 守りよもひいおんくくくくく
 春
 花のくくくくくくくくく
 むもむもむもむもむもむもむ

せしむる事なしてはよふまけ人
まじりも他と成つてなれぬや
よむらんもさうりみもゆりも男
争ふていふ

世にさうりみもゆりも男
争ふていふ
争ふていふ
争ふていふ
争ふていふ

昔はさうりみもゆりも男
争ふていふ
争ふていふ
争ふていふ
争ふていふ

争ふていふ
争ふていふ
争ふていふ
争ふていふ
争ふていふ

春

争ふていふ
争ふていふ
争ふていふ
争ふていふ
争ふていふ

いそしや年一の由りもわたりあつて
人あじきくもてあせく居りてあつて
ひそくはくわいしあつて

春

しほくはくわいしあつて
袖のしらくあつて

ぬしはくわいしあつて

春

ゆきふくうきしあつて
かほくわいしあつて

あつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて

春

あつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて

秋井のふりかへりては
水より山道南より
いかにては
厚りなき

春 新
花ももていふ
新

今一程こみさふ
とれは
為りた

おもしろい
おもしろい

今一男を
いかに

いかに
いかに

志たひ
おもしろい

おもしろい

おもしろい
おもしろい

いかに
おもしろい

しほすふちふふたれ

春

しほすふちふふたれ
しほすふちふふたれ
しほすふちふふたれ

しほすふちふふたれ

しほすふちふふたれ

しほすふちふふたれ

しほすふちふふたれ

しほすふちふふたれ

しほすふちふふたれ

しほすふちふふたれ

しほすふちふふたれ

春

しほすふちふふたれ

しほすふちふふたれ

しほすふちふふたれ

しほすふちふふたれ

しほすふちふふたれ

しほすふちふふたれ

しほすふちふふたれ

しほすふちふふたれ

春

しほすふちふふたれ

昔男とてふる地なるかすくしとくし
京にたふふくしとく

葎 ちかた何とくしとくしとくしとくし

い 久しくちかた何とくしとくしとくし

ちかた何とくしとくしとくしとくし

厚りたふ

昔清門住しとくしとくしとくしとくし

奉 ちかた何とくしとくしとくしとくし

奉 ちかた何とくしとくしとくしとくし

控送
奉

あふみまはしくまはらふらむせしん
しん那へまへの方會のりすん

昔男梅童の雨あまてく人の世のよみく

うくしん乃歌はわよても紅くま

わつたふ人へしせくうふせ

水

常のしんはわもてふまはて伊那

かみしんはまよりのくふし

し男與由たもあまはる人

しんらる井くの時水もふじま

くはしんまはむを世あふ

とる座ねらう會まは

しんねこ有るの深草にむかふ座

中らるしんはむのんまの年しん

しんまはるくすまのしんはむく

しんあふはむやあふ人

女水

野のしんはむくしんはむく

あふらるしんはむくしんはむく

しんあふらるしんはむくしんはむく

しんあふらるしんはむくしんはむく

あふらる

業平朝臣

平清盛の孫
源朝臣平阿保親王五男源三位乙敷女
源朝臣内親王桓武天皇孫南子

年月日付近将監

兼和十一年正月補藏人嘉祥二〇正月七日
源三位下貞觀元年正月七日源五位上五〇二
月十日左兵衛督治三年三月八日右近少将
三月九日右近少将以十一日正月七日五位下十五
年正月七日源三位下左兵衛督元年正月十一日
左近将中右十一月廿日源三位

二年正月十日相模将也三月十月葬入公軍
四月十日美濃将守月廿日卒

親王

平隆才三女五位下青良藤継女
承和元年十月葬信示

行平卿 河保朝三男

行平一

天長三年仲平仍平亦平業平 幼性忠義初年

承和七年正月藤人十二月辞退廿日退五下廿

十年二月仍退十三日正月退五仍其果依五

月右近少仍仁壽三年正五位下安衛之^{二月}官位

目播守字之兵部大捕天安二年二月中播

大捕守字之馬以三之^{正月}播一也貞觀二年二月

内通以二月廿之右末大之官二月仍退三月

月仍退五年二月大之仍退三月廿之備

播三月廿之無右果替以二月廿之仍退三月

九月無備中七月貞觀十二年二月十三日在後

乎十三廿之右果替十月廿之仍退三月廿之藤人仍退

三月廿之仍退三月廿之仍退三月廿之仍退三月

六年二月月中納之二十之仍退三月廿之仍退三月

元年梅大之仁和三年二月十三日仍退三月

九年堯

紀有帝

承和十一年四月十三日右兵衛大尉嘉祥之官

之右之仍退三月廿之仍退三月廿之仍退三月

仁壽元年七月廿之仍退三月廿之仍退三月

位下二月廿之仍退三月廿之仍退三月

清和元年正月十三日無備中仍退三月

二年一月後五位上同十五日近中将之安元
 年九月廿七日無少納言二月廿三日
 貞觀七年三月九日任列部授大納言二月
 十日任下野守廿五日任下野守廿七日
 年二月十七日任准無以十日二月廿七日任下
 十九日二月廿七日卒年六十三

二條后 中納言左馬頭藤原長良女也紀伊文德継女良教子
 十月廿七日宣仁元年四月十日卒年六十七

貞觀元年十月廿日任五位下五藏兼左近
 十三年十二月廿日生才一皇子^{十七}神皇正統年十九日
 二月立為皇太子十三年四月十日任左近兼
 元年四月廿三日即位日立為中宮廿六年

正月七日為皇太子次后之宮年八月九月廿日
 停后任延喜十年十二月薨六十九天壽二年

三月返後任位

河原左大臣^兼 藤原兼實

業和五年十月廿七日任位下左近六年壬
 正月廿日任位八年二月相摸与九月己亥
 近江与十五年二月右中將嘉善化守
 嘉祥二年正月七日任三位五月右衛門督
 仁壽元年八月任伊豫守卷二年仁壽改
 古德(德)伊豫守也九言

有る

百葉集第十八

伊勢物語
伊勢物語に依りて
伊勢物語に依りて
伊勢物語に依りて

六指弁

伊勢物語に依りて
伊勢物語に依りて
伊勢物語に依りて

末玉神女賦

伊勢物語に依りて
伊勢物語に依りて
伊勢物語に依りて

懷姿敬逸 儀靜體閑

伊勢物語に依りて
伊勢物語に依りて
伊勢物語に依りて

天福二年二月廿日
天福二年二月廿日
天福二年二月廿日

盲月也 風高也
盲月也 風高也
盲月也 風高也

同廿日 校年

伊勢物語
 伊勢物語根源古人説不同或言三原中
 自記之曰蘇子之退以興之詞未又言伊勢華
 作也或言三原似彼家集文辭是故于伊勢物語
 以之為後集之文辭次之心中祇密身上且其
 他人推之説以之為下流之自書也但難可奈
 古風之中多載撰集之秋仁和寺之石相託
 條章之及之末子之及之末伊勢之末之福文
 所傳自之是又見之末定流之末或之所見
 多取之末之及之末伊勢之末之福文
 梅伊勢之末或流之末特使下向伊勢仍有之者
 字之及之末難信以別載而末者日向之末

而對夜月之魚苗十山之宮我藤野之於几
 此伊勢國事多以為伊勢物語之行心所及後者
 其不富古之其作之末及之末伊勢之末
 也伊勢之末及之末伊勢之末及之末伊勢之末
 也伊勢之末及之末伊勢之末及之末伊勢之末

是年一少書之平為人被借大仍備謹奉
 書寫柱合也
 戶部尚書前

近代以將使事為獨々平身未代々
人上業也更不可用

世物語古人之役不同或稱平將々
自去或稱仔瑤々業作物以古者為
落々上上古人強々不可尋之化者
其下歌詞美々業之也

戸部尚書

永祿三年冬村上漸書寫柱合事



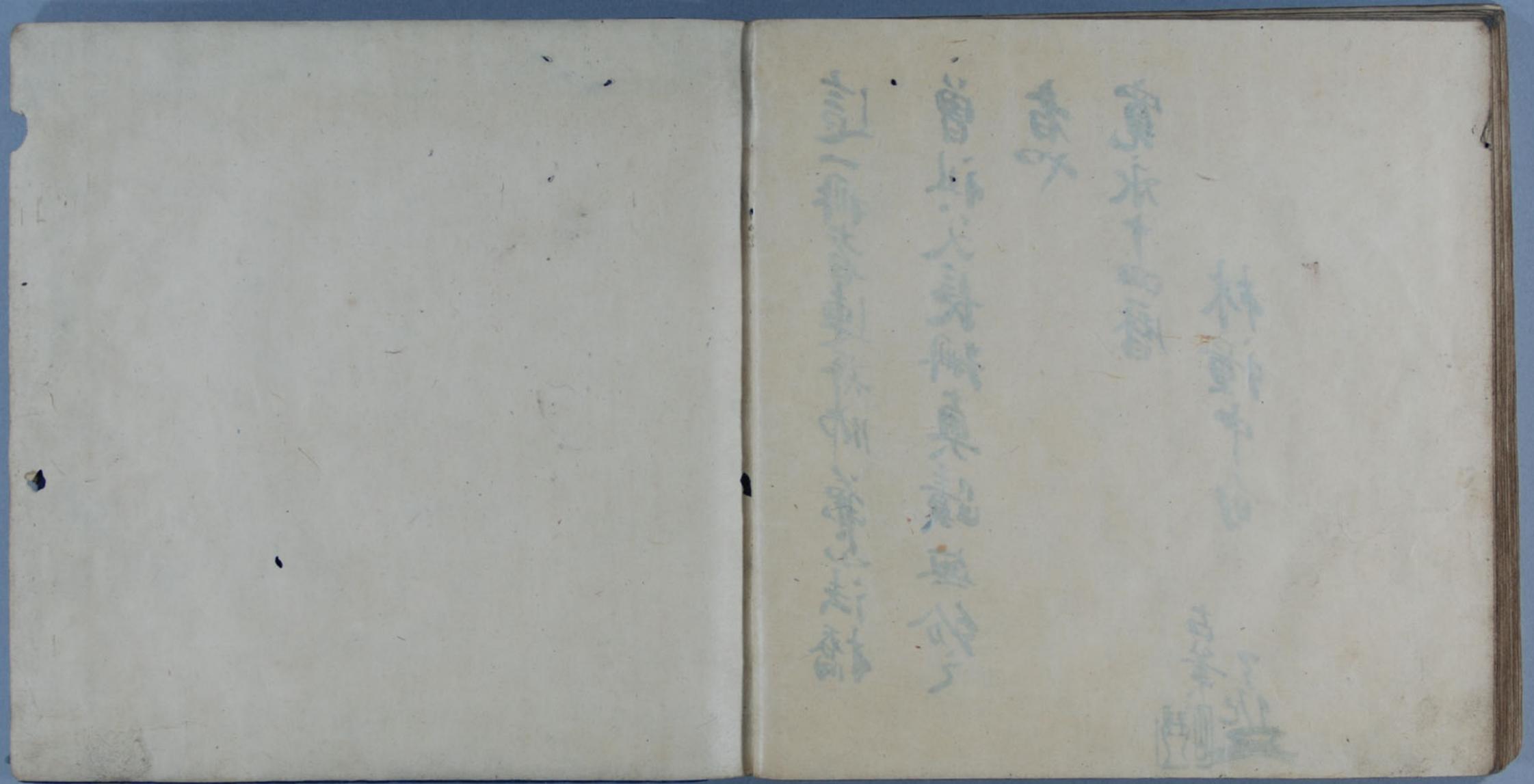
這一冊者連所助書之法
曾以久長辨真蹟
有也
寛永十四年

這一冊者連舟師兼法橋
曾祖父長冊真蹟無紛之
者也

寬永十四曆

林鐘中旬

古筆
了化



寛永十一年
 曾孫大尉解真龍與公
 此二冊大尉製本也



